

生き生きと英語で伝え合う子供の育成

～「話すこと」における自己調整を促す指導の充実～

霧島市立日当山小学校 教諭 南木 清美

目次

I	はじめに	2
II	研究主題設定の理由	2
III	研究の内容	3
1	研究主題及び副題等に関する基本的な考え方	3
(1)	「生き生きと英語で伝え合う子供」とは	
(2)	「自己調整をしながら学習に取り組む」とは	
(3)	『「話すこと」における自己調整を促す指導の充実』とは	
2	研究の仮説	5
3	研究の構想	5
IV	研究の実際	5
1	視点ア「Planning」段階の手立ての充実	5
(1)	子供が切実な課題と捉えることができる単元のゴール設定の工夫	
(2)	自分に合っためあての設定を促す工夫	
2	視点イ「Monitoring」段階の手立ての充実	8
(1)	指導計画の見直し	
(2)	様々な学習教材の準備の工夫	
3	視点ウ「Reflection」段階の手立ての充実	9
(1)	学習履歴の蓄積	
(2)	振り返りの充実	
V	研究のまとめ	10

引用文献，参考文献等

- 文部科学省（2018）『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編』
- 文部科学省（2018）『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語活動・外国語編』
- Zimmerman, B. J. (1989) "A social cognitive view of self-regulated academic learning." *Journal of Educational Psychology*, 81, 329-339.
- 伊藤崇達（2008）『「自ら学ぶ力」を育てる方略-自己調整学習の観点から-』 ベネッセ教育総合研究所 https://berd.benesse.jp/berd/center/open/berd/backnumber/2008_13/fea_itou_01.html（2022年11月25日閲覧）
- Zimmerman, B. J.・Schunk, D. H. 編，塚野州一・伊藤崇達監訳（2014）『自己調整学習ハンドブック』北大路書房
- 加藤希支男（2022）『「個別最適な学び」を実現する算数授業のつくり方』明治図書出版
- 谷口篤・豊田弘司（2020）『実践につながる教育心理学』 八千代出版
- 奈須正裕（2021）『個別最適な学びと協働的な学び』 東洋館出版社
- 前田康裕（2022）『まんがで知る デジタルの学び ICT教育のベースにあるもの』 さくら社

I はじめに

ドジャース入団を決めた大谷翔平選手。彼が高校1年の時に書いた「目標達成シート」を思い出した。マンダラチャートの真ん中には一番大きな夢が書かれ、その周りの8マスには目標を達成するために必要な要素が記入されている。「8球団からのドラフト1位指名」という夢は実現し、今や世界的に活躍する一流プレイヤーとなっている。この大谷選手の夢を追いかける姿こそ、学校で子供たちに伝えたい大切なことだと感じている。

私は昨年度、学校現場を離れ、長期研修にて外国語の研究に取り組んだ。外国語の学習に意欲的に取り組む子供がいる一方、様々な課題をもつ子供も多く、更にきめ細かな個に応じた指導の充実が必要であると感じていた。そして、改めて自ら学び直すことで、子供観、授業観、指導観の転換を図りたいと思ったことがきっかけだった。研究主題を「生き生きと英語で伝え合う子供の育成」と設定し、「自己調整学習理論」を基に、自己調整を促す指導の充実に向けて手立てを模索した一年間であった。

本年度は、SET加配として3年生から6年生までの子供たちに外国語活動及び外国語科の指導を行うこととなり、昨年度の研究を実践に生かす機会を得た。先に紹介した大谷選手のように、子供たちが、自ら設定した目標を達成するために意欲的に学び進めることができる、そんな外国語の授業を目指して実践したことを、ここにまとめたい。

II 研究主題設定の理由

情報化やグローバル化が加速度的に進む社会において、子供一人一人が思い描く幸せを実現するためには、それぞれが社会の変化に主体的に関わり合い、自ら学び、自ら考え、判断して行動することが求められている。このような時代背景の中、学習指導要領では、「知識及び技能」の習得と「思考力、判断力、表現力等」の育成、「学びに向かう力、人間性等」の涵養という、資質・能力の三つの柱の育成をバランスよく実現することや、「何を学ぶか」だけでなく「どのように学ぶか」を重視した授業改善の重要性が述べられている。その中で、小学校外国語科においては、これまで以上に言語活動を重視し、自分の考えや気持ちを伝え合う活動を通した三つの資質・能力の育成が必要であるとされている。

しかしながら、これまでの筆者の授業実践では、言語に慣れ親しむためのゲーム活動は楽しく取り組むが、自分の考えや気持ちを伝え合うことに関しては消極的な子供の姿が見られることが少なくなかった。そこで、本校の子供の実態を把握するために意識調査を行った結果、23.1%の子供が、「英語を話すことは楽しくない。」と答えた。理由として、「単語を覚えるのが難しい。」、「発音が難しい。」などが挙げられたことから、子供の「知識及び技能」の習得に関する過度の意識が、「話すこと」への態度にマイナスの影響を与えているのではないかと考えた。また、子供が学習に対して受け身であるのは、英語で自分の考えや気持ちを伝えるために、自ら学び方を振り返り工夫して言語を獲得していこうとする視点からの指導が不十分であったからではないかと考えた。

そこで、「主体的に学習に取り組む態度」の評価の一つの側面である「自らを調整すること（以下、自己調整）」に主眼を置き、指導の充実を図ることが必要であると考えた。そのことによって、子供が自分の考えや気持ちを伝えたいという目標を明確にもち、その達成に向けて必要な「知識及び技能」を獲得したり、「思考力、判断力、表現力等」を活用したりしながら学びを試行錯誤する学習プロセスを確立することができ、英語を話すことの楽しさを感じながら生き生きと英語で伝え合う子供を育成できると考えた。

III 研究の内容

1 研究主題及び副題等に関する基本的な考え方

(1) 「生き生きと英語で伝え合う子供」とは

学習指導要領には、「母語を用いたコミュニケーションを図る際には意識されていなかった、相手の発する外国語を注意深く聞いて何とか相手の思いを理解したり、もっている知識などを総動員して他者に外国語で自分の思いを何とか伝えようとする体験を通して、日本語を含む言語でコミュニケーションを図る難しさや大切さを改めて感じる事が、言語によるコミュニケーション能力を身に付ける上で重要であり、言語への興味・関心を高めることにつながる。」とある。

このことから、自分の考えや気持ちを相手によりよく伝えるために試行錯誤して学習に取り組み、獲得した語彙や表現を用いて、どのように伝えればよいか工夫するといった自己調整をしながら学ぶ経験を積むことは、これからの時代を生きる子供にとって意義があると考えられる。

そこで、研究主題設定の理由を踏まえ、本研究における「生き生きと英語で伝え合う子供」を、次のような子供であると定義し、研究を進めることとする。

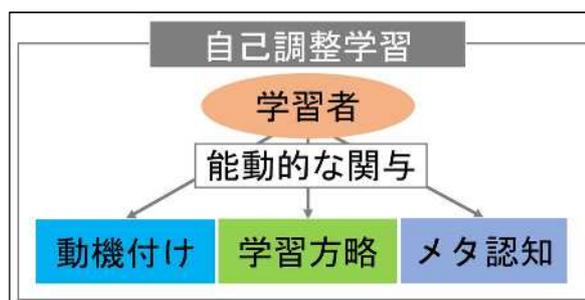
自己調整をしながら学習に取り組み、既習の英語の語彙や表現を用いて、相手に伝わるように工夫しながら自分の考えや気持ちについて自信をもって話す子供

(2) 「自己調整をしながら学習に取り組み」とは

自己調整を促す視点からの子供へのアプローチについて研究されたものとして、「自己調整学習理論」がある。これは、アメリカの教育心理学者である Barry J. Zimmerman らが提唱している教育心理学の理論体系である。また、近年では、「自己調整学習」と学力との関係についても明らかにし、日本においても、彼らの理論に基づいた研究や教育実践が多数行われている。そこで、本研究では、Zimmerman の「自己調整学習理論」に基づき、自己調整について整理した上で、「自己調整をしながら学習に取り組み」とは、具体的にはどういうことかを明らかにしたい。

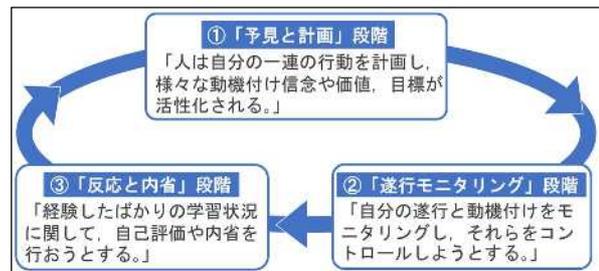
まず、Zimmerman (1989) は、「自己調整学習」とは、動機付け、行動、メタ認知において、自らの学習過程に能動的に関与し進められる学習であると述べている。また、この Zimmerman の理論を基に、伊藤 (2008) は、学習者が動機付け、学習方略、メタ認知の3要素において自分自身の学習過程に能動的に関与していることと定義し、学習者が自律的に学んでいる姿をまとめている【図1】。さらに、Zimmerman ら (2014) は積極的な自己調整者は、学習目標を設定する、効果的学習方略を遂行する、目標の進行をモニターし評価する、学習しやすい環境をつくる、学習に対する自己効力感をもち続けると述べている。

これらのことから、自己調整とは、学習者が心理的側面としての動機付け、学習方略、メタ認知を働かせながら、自らの状況に応じた目標を設定し、自分に合った学び方を選択したり、学びを俯瞰して学んだ成果や課題を把握したりすることである。また、必要なときには、友達や指導者などに対して自ら援助を要請して学習しやすい環境をつくり、目標達成に向かって努力を続け、目標が達成されると、また新しい目標を設定する循環的なプロセスを踏むことであると捉えた。



【図1】学習者が自律的に学んでいる姿
(伊藤 (2008) を参考に作成)

次に、Zimmermanら（2014）は、先述した望ましい「自己調整学習」の進み方は、【図2】に示した①「予見と計画」段階、②「遂行モニタリング」段階、③「反応と内省」段階の三つの段階で構成される循環的なプロセスを踏んでいくとしている。



【図2】Zimmermanら（2014）の理論に基づく自己調整をする循環的なプロセス

そこで、「自己調整をしながら学習に取り組む」とは、具体的にどのようなことか、次のように捉えた。

自分に合った目標と見通しをもち（①「予見と計画」段階）、自分に合った学び方を選択して学習に取り組み、自分の学びを俯瞰し学び方や動機付けをコントロールしたり、援助要請をしたりする（②「遂行モニタリング」段階）。そして、学習後には、振り返りを行い、次の学びへとつなぐ（③「反応と内省」段階）。これらの三つの段階を、循環的なプロセスとして繰り返し踏みながら、自ら学ぶことへの動機付けを高め学ぶこと。

(3) 「『話すこと』における自己調整を促す指導の充実」とは

「話すこと」における自己調整をする循環的なプロセスについて、【図2】を基に捉え直しをした【図3】。

まず、「予見と計画」段階を、「Planning」段階と置き換えた。ここでは、子供が言語活動で設定された課題を、話せるようになりたい切実な課題と捉え（①-a）、自己の学習状況から、自分に合っためあてを設定する（①-b）。そして、そのめあてを達成する



【図3】「話すこと」における自己調整をする循環的なプロセス

ための見通しをもち、適切な学び方を選択する（①-c）段階とした。

次に、「遂行モニタリング」段階を、「Monitoring」段階と置き換えた。ここでは、子供が、①の段階で設定しためあての達成に向けて学習を進め（②-a）、自分の考えや気持ちがよりよく伝わるように相手意識をもち、話す内容や方法を工夫する（②-b）段階とした。

最後に、「反応と内省」段階を、「Reflection」段階と置き換えた。ここでは、子供が、①の段階で設定した自分に合っためあてと②の段階で学習した結果とを比べて自己評価を行い（③-a）、どうすれば相手によりよく伝えられるか、次の学びを見通す（③-b）段階とした。

このように、自己調整をする循環的なプロセスの三つの段階を、子供が効果的に踏むことを促す指導の充実を図ることで、子供が自ら学びに能動的に関わりながら、自分の考えや気持ちを相手によりよく伝えるために試行錯誤して学習に取り組み、コミュニケーションを図る楽しさや大切さに気付くのではないかと考えた。

そこで、前述したような学びに向かう子供の姿を具現化するために、「『話すこと』における自己調整を促す指導の充実」を次のように捉えた。

子供自らが自己調整をする循環的なプロセスの三つの段階を効果的に踏めるように、学習の進め方と学び方を支援したり、自己調整を促す学習環境を整えたりすること

2 研究の仮説

研究を進めるに当たり、研究の基本的な考え方を踏まえ、次のように研究の仮説を設定する。

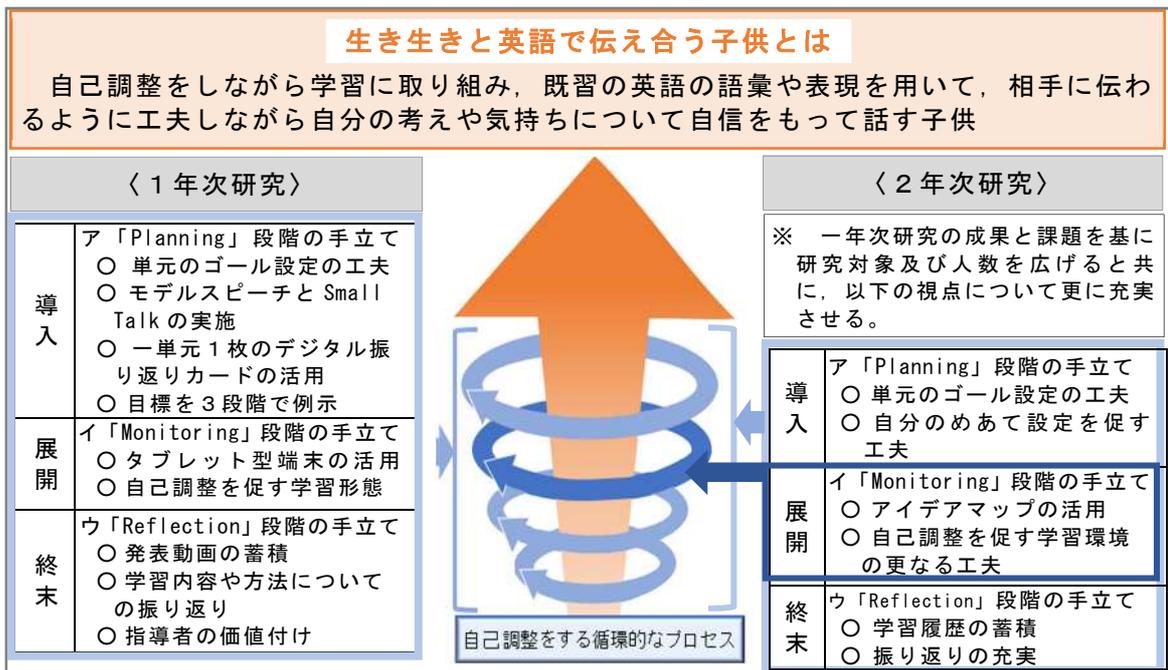
小学校外国語科において、学習の進め方と学び方を支援したり、自己調整を促す学習環境を整えたりするなど、「話すこと」における自己調整を促す指導の充実を図れば、生き生きと英語で伝え合う子供を育成することができるのではないかと仮説を立てた。

3 研究の構想

昨年度（1年次）の研究の仮説に対して得られた結果は、次のとおりである。

- 単元のゴール設定を工夫し、発表の目標を具体的に共有したことで、子供の目標達成への動機付けを高めることができ、「Planning」段階において、自分に合っためあてをもつ子供の姿が見られた。
- 指導計画を見直し、タブレット型端末を活用したり学習のローテーションを取り入れたりしたことで、子供に自己調整を繰り返し促すことができ、「Monitoring」段階において、相手に伝わるように自分なりの方法で試行錯誤して学ぶ子供の姿が見られた。
- 一単元1枚のデジタル振り返りカードを活用したことで、子供に自分の学びを俯瞰させることができ、「Reflection」段階において、試行錯誤して学んだ達成感を味わい、得られた成果と課題を次の学びへとつなごうとする子供の姿が見られた。

本年度は、昨年度得られた成果と課題を発展すべく、研究対象を5年1学級から5・6年の全児童へと広げると共に、子供が自己調整をする循環的なプロセスの三つの段階を効果的に踏むことを促す更なる指導の充実を図り、検証を行うこととする【図4】。

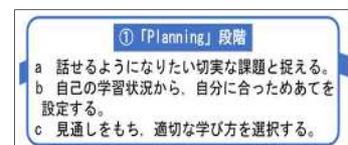


【図4】 研究構想図

IV 研究の実際

1 視点ア「Planning」段階の手立ての充実

「Planning」段階においては、【図5】のように、子供が達成したいと思う単元のゴールと出合い、自分に合っためあてをもち、どうすれば達成できそうか見通しをもち学び方を選択できるように自己調整を促すことが大切である。そこで、次のように手立てを工夫した。



【図5】「話すこと」における自己調整をするプロセスの「Planning」段階

(1) 子供が切実な課題と捉えることができる単元のゴール設定の工夫

子供が、自分に合うめあてをもち、達成に向けて意欲的に取り組むためには、言語活動で設定された課題が、子供にとって話せるようになりたい切実な課題である必要がある。そこで、単元のゴール設定に当たり、単元で扱う語彙や表現を中心に、既習の語彙や表現も活用して話せる内容で、子供が「おもしろそう。」「やってみたい。」と思うような子供の興味・関心に合った題材を設定した。また、外部人材を積極的に活用し、誰に、何のために伝えるのかといった伝え合う必然性のある題材となるように工夫した。5年生と6年生での主な実践は、以下のとおりである。

<5年生>

※ 子供の振り返りについては、原文のまま掲載

Unit 4 She can sing well. 「できること」

<単元のゴール>
ALTの先生に、日当山小の先生のこと
がよく伝わるように紹介しよう。



日当山小の先生に”Can you~?”とインタビューして分かったことを基に、先生のできることを含めた先生紹介をした。

【写真1】先生紹介の様子

9/21 第6時

★自分のめあて
アンディ先生によく伝わるようにわかりやすい発音でビデオレターを作ろう。

◎ 単元の学習を振り返りましょう。

アンディ先生に伝えるためにたくさん練習をしているうちにいつの間にかいろいろな英語が言えるようになっていました。自分で張り切って頑張りました。少し失敗したところもあったけどグループの仲間たちと協力して無事に動画を作ることができました。次が最後の単元なので頑張りたいと思います。

先生から	
<input type="checkbox"/>	もっと書こう
<input type="checkbox"/>	理由を書いて
<input type="checkbox"/>	何を学んだの?
<input type="checkbox"/>	次の課題は?
<input type="checkbox"/>	がんばって!
<input type="checkbox"/>	伸びてます!

【図6】子供の振り返りカード

Unit 5 This is my sister.
「身近な人のしょうかい」

<単元のゴール>
国分南小の友達に、日当山小の仲間の
ことがよく伝わるように紹介しよう。



単元の導入では、国分南小とオンラインで繋ぎ交流を行い、動機付けを図った。単元終末には、できることや得意なことの実演も入れながら仲間紹介ビデオレターを作成した。

【写真2】友達紹介の様子

第5時

★自分のめあて
次の時間は国分南小にビデオレターを作るためにしっかりと練習して準備する。友達のことをしっかり伝えるように練習する。

今日の学習では、どんな方法で学習して、何が分かったり、できるようになりましたか。また、分からなかったり、できなかったりしたことは、次にどんな方法で学習すればできそうですか。

前の時間よりも綺麗な発音で友達のことを紹介できた。次の時間はビデオレターを作るから今日よりも綺麗な発音で間違えないように友達のこと話紹介したい。南小の人に伝わるようなビデオレターを作りたい。

先生から	
<input type="checkbox"/>	もっと書こう
<input type="checkbox"/>	理由を書いて
<input type="checkbox"/>	何を学んだの?
<input type="checkbox"/>	次の課題は?
<input type="checkbox"/>	がんばって!

【図7】子供の振り返りカード

<6年生>

Unit 1 I'm from Tokyo, Japan. 「自己しょうかい」

<単元のゴール>
台湾出身の 〇〇 さんに、自分のことが
よく伝わるように自己紹介しよう。



地域の施設で働いておられる台湾出身の方とオンラインで繋ぎ、台湾の文化紹介をしていただいた。子供たちは対面とビデオレターでこの方へ向けての自己紹介をした。

【写真3】自己紹介の様子

今回の自分のことを紹介しようで 〇〇 さんもきてもらって一緒に勉強してもらって楽しかったです。これからもじぶんの紹介の時に得意なこと好きなこと好きな食べ物好きな色を他の外国人やいろいろな人につたえられるようになりたいです。あともう少し他の国の人や先生やオンラインで他の学校の人とかと交流して外国語を話したいです。

次の外国語が楽しみです。

さんと一緒に学習して思ったことは、はかの国の人と喋るのが少し難しかったり、 〇〇 さんの言葉があまり分からなくて、これからこのような他の国の人たちと喋ることがあったらしっかりと言葉を理解出来るようにこれからも英語を頑張りたいです。

【図8】子供の振り返りカード

Unit 3 I want a big park in our town.
「自分たちの町・地域」

<単元のゴール>
中国からの留学生に、霧島市のよさを伝えよう。



鹿児島大学の中国人留学生を招聘し、文化紹介、中国語ミニ講座などをしていただいた。子供たちからは霧島市にある施設などおすすめの場所を紹介した。

【写真4】空港を紹介する様子

何回もチャンツを聞いて、この単元に出てくる言葉を覚えることができた。

紹介文をつくる時は、どうしたら 〇〇 さんに霧島市のことがよく伝わるかを考え、工夫してつくった。

〇〇 :さんたちのグループの発表が、とても聞き取りやすく、前に習った言葉を紹介に使っていたのでとてもわかりやすかった。

〇〇 さんに伝えたいことが伝わったからよかった。そして、今日の自分のめあての「聞いている人が聞こえるぐらいの声の大きさを発表する」ということができて、声の大きさのことを 〇〇 さんにほめられたからよかった。

【図9】子供の振り返りカード

Unit 5 What did you do last weekend.
「週末のできごと」

〈単元のゴール〉

フランスのエコール小学校の友達に、自分のことや日本での週末の過ごし方を紹介しよう。



【写真5】手紙を書く様子

単元導入時は動画や写真の交流を行った。子供はペアとなったフランスの友達に、自分のことや週末にしたことを伝えるために相手意識をもって学習を進めていた。



【図10】子供が書いた手紙

必然性のある単元のゴールを設定することで、子供たちは、自分の心と向き合いながら、意欲的に相手に伝えたいことを膨らませていくことができた。そして、自分の知っている英語を駆使したり、分からない語彙はタブレットで検索し音声を繰り返し聞いて発音したりしながら、何とかして相手に伝えようとする姿が見られた。

(2) 自分に合っためあての設定を促す工夫

子供一人一人の学習進度、学習到達度や興味・関心は異なることから、子供は、できるようになりたい切実な課題を達成するための、自分に合っためあてを設定する必要がある。そこで、学級で同じめあてを設定する従来の方法から、子供が自分でめあてを考える方法へと転換した。そして、指導者と子供で考えるめあてに乖離が生じないように、指導者が考える単元の目標を子供と共有することとした。

まず、指導者と子供で目標を共有するに当たり、小中連携を図った CAN-DO リストを作成した【図11】。日当山小の大部分の子供は、隣接する日当山中へ進学する。そこで、中学校の英語教諭と連携を図り、中1入門期の課題を踏まえ、小学校段階で子供に身に付けさせたいことを確認した。そして、単元の5領域における目標を、小学校卒業時の目標からバックワードデザインで一覧表にまとめる作業を行った。そうすることで、指導者は、目標をより意識した授業づくりができる実感した。

月	Unit (単元) 題材	学習活動 (GOAL)	学習目標の達成	主要言語材料	読書・語句例	学習到達目標 (CAN-DOリスト形式)			
						聞くこと	読むこと	話すこと (やり取り)	話すこと (発表)
3	Unit 1 I can speak English.	新しい学校の友達と仲良くなるために、自分のことがよく分かるように自己紹介をしよう。	自己紹介を説明する 質問する	I'm good at ~. I can ~. This is my friend ~. He (She) can. (is good at) ~.	得意なこと、好きなことなど、5年生で学習した読書や表現	自己紹介や読者紹介を聞いて、相手の言いたいことを理解することができる。	自己や読者のことについて読書表現を用いて伝え合うことができる。		自分の名前や学校をへボン式で書くことができる。
4	Unit 1 I'm from Tokyo, Japan.	地域に住む外国の人と仲良くなるために、自分のことがよく分かるように自己紹介をしよう。	自己紹介を説明する 質問する	I'm from (Paris, France). I'm good at (drawing). What's your favorite (sport)? My favorite (sport) is (baseball). When's your birthday? My birthday is (January 1st).	得意なこと、好きな物事 (singing, drawing, sport, animal など)	自己しようかいて聞いて出身地、得意なもの、誕生日を聞いて理解することができる。 b.c.d.f.gから始まる単語を聞いて、単語の語文字を理解できる。	出身地、得意なこと、好きなもの、誕生日を単に出して読むことができる。	好きな食べ物・教科書のように、いろいろな大好きなものをたずねたり答えたりすることができる。	外国の人に対する自己しようかいて見本を見ながら、ていねいに書き写すことができる。 b.c.d.f.gから始まる単語を聞いて、単語の語文字を書くことができる。
7	Let's Read and Write 1								

【図11】第6学年年間指導計画における CAN-DO リスト (一部抜粋)

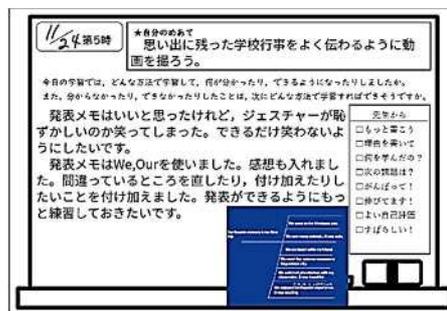
次に、CAN-DO リストを基に、単元ごとのルーブリックを作成し、単元の導入時に子供へ配布して、その単元でどのような表現を使って、どのような活動を行うことを目指すかを明確に子供に示した。ここでは、子供が、単元を通して自己評価を行いながら自分のめあてを更新できるように、評価の尺度として、右肩上がりに Step 1 ~ 4 を設定し、「まだ難しい段階」から「すばやく間違わずにできる段階 (これまで学習した他の表現も入れて)」まで、スモールステップで自らの学びの達成度を視覚的にも分かるように工夫した【図12】。子供が実際に自己評価をする際には、

目標	Step1 Step2 Step3 Step4			
	聞くこと	友達の思い出の学校行事を聞いて、そこでしたことや感想を理解することができる。		
読むこと	友達の思い出の学校行事やそこでしたことや感想を、声に出して読むことができる。			
話すこと (やり取り)	思い出の学校行事をたずねたり、答えたりすることができる。			
話すこと (発表)	友達と共有したい自分の思い出の学校行事を、相手が理解できるように伝えることができる。			
書くこと	思い出の学校行事やそこでしたこと、その感想を、見本を見ながら、書き写すことができる。			

【図12】第6学年 Unit 6 I enjoyed school. ルーブリック

子供のパフォーマンスと関連付けながらできていたところを認め励ますようにしたことで、子供がより達成感を味わう姿が見られた。

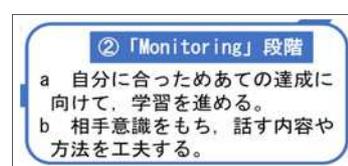
めあての記入に当たっては、ロイロノート・スクール（以下、ロイロノート）上に、デジタル振り返りカードを作成し活用した。振り返り際には、ロイロノートの利便性を生かし、前時に獲得した語彙や表現を録音・録画したり学習教材を保存したりして、学びの足跡を残せるようにした。それによって、単元の目標達成を目指し、自分の学習状況から次時の自分のめあてや学び方を考える姿が見られるようになった【図13】。



【図13】子供のデジタル振り返り

2 視点イ「Monitoring」段階の手立ての充実

「Monitoring」段階においては、【図14】のように、子供が自らの課題に対するやる気や学び方をコントロールしながら試行錯誤して話す内容や方法を工夫できるよう、自己調整を促す学習環境を整えることが大切である。ここでは、5年生の単元「行きたい国の紹介」で実践したことを基に、工夫した手立てについて述べたい。



【図14】「話すこと」における自己調整をするプロセスの「Monitoring」段階

(1) 指導計画の見直し

子供が、既習の表現を駆使しながら相手意識をもち話す内容や方法を工夫するためには、子供が、知識及び技能と学び方を習得する一斉学習を充実させることが必要である。そこで、新出語彙や表現及び学び方を学ぶ一斉学習と、自分のめあての達成に向けて試行錯誤する個別学習、学びを共有する一斉学習とに分けて単元計画を作成した【図15】。

時	主な学習活動	
1	単元のゴールを知り、発表のイメージを広げ、単元の学習の見通しをもつ。	【1単位時間を構成する学習形態と時間配分】
2	行きたい国とその国でしたいことを聞き取ることができる。	
3	行きたい国とその理由を伝える言い方に慣れ親しむ。	
4	行きたい国とその理由を伝えることができる。	
5	友達に興味をもってもらえるように、行きたい国とその魅力について紹介することができる。	
6	友達に興味をもってもらえるように、行きたい国とその魅力について、更に工夫して紹介することができる。	
7	友達の発表を聞いて、行きたい国とその理由などを聞き取ることができる。単元の学習の振り返りをする。	

【図15】5年生「行きたい国の紹介」単元指導計画

学びを共有する一斉学習とに分けて単元計画を作成した【図15】。

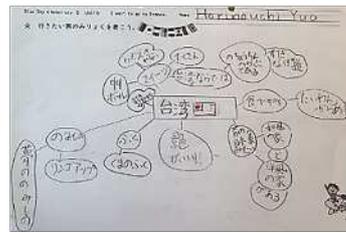
次に、谷口・豊田（2020）がまとめた「自己調整学習の次元」【表1】を基に、子供が自分の学びを調整できるように学習環境の設定を工夫した。谷口・豊田は、自己調整学習は、単次元の現象ではなく、多くの次元からなる複合的な現象であることから、どのような次元で学習者自身による選択や調整がなされているかが重要であり、全ての次元で他者による調整がなされているとすれば、自己調整学習とは言えないと述べている。また、奈須（2022）は、「すべての子どもは、生まれながらにして有能な学び手」としており、一人ひとりの違いがよりよく学び育つ基盤となるようにすべきであると述べている。そこで、単元のゴール「友達が行ってみたいと思うような、お勧めの国紹介CMをつくろう。」の達成に向けて、単元中盤の個別学習では、子供を信頼して学びを委ねることにした。そして、紹介する国や個人又は協働の選択を子供に任せ、自分にあった学び方を選択できるように複数の教材を準備し、試行錯誤できる時間を十分に確保することとした。

【表1】自己調整学習の次元（谷口・豊田（2020））

次元	主要な自己調整過程
動機	学習目標、自己効力感
方法	学習方略、習慣化されたパフォーマンス
時間	時間管理
行動	自己観察、自己判断、自己反応
物理的環境	環境構成
社会的環境	対人ネットワーク作り、選択的な援助要請

(2) 様々な学習教材の準備の工夫

子供が自分に合ったためあての達成に向けて、自らの学習状況に応じた学び方を選択し、試行錯誤して学習に取り組めるように、まずは、子供が相手に伝えたい思いを膨らませたり可視化したりできるアイデアマップを活用した【図16】。子供は、インターネットで調べた国の魅力などを随時マップに書き加えながら、友達にどんな内容を英語でどのように伝えればよいか考えることができた。相手に伝えたい内容が膨らむことが、何とかして英語で伝えたいという学習への動機付けに繋がることを実感した【図17】。

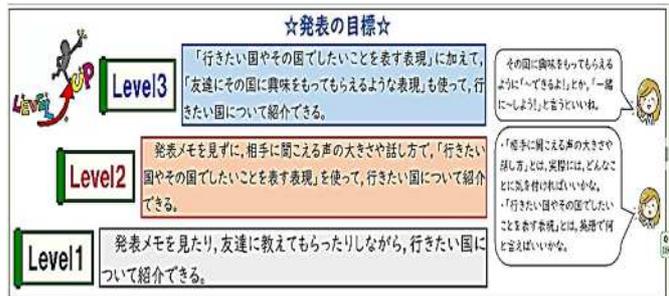


【図16】行きたい国（台湾）で紹介したいことのアイデアマップ

台湾には、沢山の魅力があった。とても魅了された。
台湾に行きたいと思ったのは海と琵琶湖がきれいだから選びました。調べれば調べるほど魅了されて難しい英語もあるけれどめげずに、台湾の魅力をもみんなに伝えたいです。

【図17】台湾について調べた子供の振り返り

次に、「どうすれば友達によりよく伝わる発表となるか。」と子供に投げかけ、子供と話し合いながら発表の目標【図18】を共有した。始めは、Level1でグループの友達と教え合いながら発表していた子供たちも、よりよい発表のイメージを明確にもつことで、発表内容や方法について個で工夫する姿が見られた【図19】。



【図18】発表の目標

Hello. I want to go to India. You can eat naan and curry. I want to buy ganesha. I want to drink rossy. I want to see elephants. I want to visit fantastic Taj mahal. You can play cricket. Let's go to India.

【図19】インドについての紹介

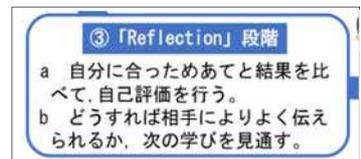
さらに、子供が必要なときに必要な表現を獲得できるように、ロイロノートを活用した学習教材を作成した。特に、【図20】の発表メモは、子供が伝えたいことを記入し、カードの順番を変えながら話す内容を工夫する際に活用できるようにした。また、イラストやセンテンスのカードに予め音声を録音しておき、子供が必要なときに必要なだけ音声を聞いて練習できるようにした。自分でやればできるという自己効力感を味わいながら、既習の表現を交え意欲的に学び進める子供の姿が見られた。



【図20】発表メモの活用

3 視点ウ 「Reflection」段階の手立ての充実

「Reflection」段階においては、【図21】のように子供が学びを振り返り、次の学びへつなぐ動機付けとなるように、自分の学びを俯瞰し達成感を味わえる場を設定することが大切である。そこで、次のように指導の充実を図った。



【図21】「話すこと」における自己調整をするプロセスの「Reflection」段階

(1) 学習履歴の蓄積

子供が、自分で設定したためあてと結果を比べて適切に自己評価を行えるようにするためには、学びの可視化が必要である。そこで、ロイロノートを活用し、子供が自分の発表の動画を撮り、最もよくできた発表を指導者に提出する場を設定した。また、子供が、自分のノートに単元内で録画した発表動画を蓄積することにより、学習の伸びを実感できるようにした。

(2) 振り返りの充実

子供が、相手によりよく自分の思いを伝えるために必要な次の学びを見通せるようにするために、学びの振り返り方を支援することも大切である。そこで、学習内容と併せて学び方についても振り返りの視点を示した【図 22】。また、記入の参考となるような友達の振り返りの紹介も行った。振り返りの時間を毎時間確保することで、子供の記入する文章量が増え、充実した振り返りができる姿が見られるようになった。

今日の学習では、どんな方法で学習して、何が分かったり、できるようになったりしましたか。また、分からなかったり、できなかつたりしたことは、次にどんな方法で学習すればできそうですか。

【図 22】振り返りカードに示している振り返りの視点

V 研究のまとめ

子供の自己調整をする視点に関する意識の変容を把握し検証結果を明らかにするために、6年児童を抽出し、調査を行った。また、本研究は、昨年度からの継続研究であり、本年度は更に手立ての充実を図ったことから、本論で述べた全ての手立てを実践した2学期の子供の意識の変容について、分析及び考察を行った【表 2】。

(調査日:2023年9月初旬, 12月下旬, 対象:本校第6学年82人, 調査方法:調査紙)

【表 2】自己調整をする視点に関する意識調査結果

段階	項目	授業前 平均値	授業後 平均値
① 「Planning」 段階	自分のめあてをもって取り組んでいますか。	3.12	3.13
	どのような学習をするか見通しをもって取り組んでいますか。	3.02	3.11
	自分のめあてをもって意欲的に取り組めば、めあてを達成することができると考えていますか。	3.17	3.39
② 「Monitoring」 段階	これまで習ったことを思い出し、今の学習に生かすようにしていますか。	2.27	3.26
	うまく学べないときには学習のやり方を見直したり修正したりしていますか。	2.78	2.98
③ 「Reflection」 段階	自分の学びを振り返り、できなかったことを確認し、どのような学習をすればできるようになりそうか考えていますか。	2.94	2.96
	次の時間にできるようになりたい自分のめあてを考えていますか。	2.91	3.01

※ ア 当てはまる(4点)、イ どちらかといえば当てはまる(3点)、ウ どちらかといえば当てはまらない(2点)、エ 当てはまらない(1点)として平均を算出

全ての調査項目において、授業前と授業後の平均値の差について、t検定(t-test)を用いて分析すると、「自分のめあてをもって意欲的に取り組めば、めあてを達成することができると考えていますか。」「これまで習ったことを思い出し、今の学習に生かすようにしていますか。」「うまく学べないときには、学習のやり方を見直したり修正したりしていますか。」の項目について有意差が認められた。これらのことから、「Planning」段階において、ルーブリックを活用し、単元目標に向けて段階的に自分のめあてをもてるように促す手立てについて効果があると推測される。また、「Monitoring」段階において、指導計画の見直し、子供の考えを可視化するアイデアマップの活用や具体的な発表の目標の共有、子供が必要なときに必要な表現を獲得できるロイロノートを活用した学習教材の準備などの手立てが効果的であると推測される。一方、他の項目においては、有意差が認められなかった。「Reflection」段階におけるデジタル振り返りカードを活用した学習履歴の蓄積及び振り返りの充実の手立てについては、4月から継続して実践していたため、本調査期間においての変容が認められなかったのではないかと推測できる。しかし、この段階の授業後平均値が最も低いことから、子供が学びの振り返りから次の学習を見通すことができるように、更に指導の充実を図る必要があると考える。

本研究では、「話すこと」における自己調整を促す指導の充実を図ることで、生き生きと英語で伝え合う子供の育成を目指した。授業の様子や振り返りの記述から、自分に合っためあてを設定することのよさや、試行錯誤しながら学んだ達成感、英語を話すことの楽しさなどを味わう子供の姿が見られた。今後も、子供が自ら目標をもち学びを調整するよさを実感し、教科の枠を超えて生きて働く力となるよう、更に研究を深めたい。